

Rock The Life! ezorock

環境対策活動環境対策活動
Earth Care



RISING SUN ROCK FESTIVAL 2016 in EZO(以下RSR)に向けて、RSRオーガニックファーム、NINOMIYAと作り込み中です。昨年のボランティアで今年はコアスタッフとして参加!というメンバーもあり、春らしく新風が吹き込んでいます。今年はどんな夏になるのかワクワクが止まりません!ボランティア募集中。みなさんの参加をスタッフ一同お待ちしております。

北海道の大自然の下で、子どもたちに生きる力を。
石狩体験キッズ「チポロ」



「ふくしまキッズ北海道ボランティア」チームが、名前を変えて再始動しました!今度の主な舞台は「石狩」。年間8回行われるおもしろ探検隊というプログラム等に向けて準備中。ふくしまキッズもいくつかの地域で実施されます!子どもが思いっきり野外で遊ぶためには、大人が遊び方を知らなくては行けない。各地のキャンプに参加してアウトドアスキルなどを学ぶ研修も継続しています。

見える循環
RSRオーガニックファーム



オーガニックじゃがいも、順調に成長中です!4月下旬に種いもを植えてから約1か月。芽が出て、葉も生い茂ってきました。今はじゃがいもの成長を促進させるために、雑草抜きを行っています。来年度使用する堆肥攪拌もツアーで行っています。今年もRSRでオーガニックじゃがいもを配付予定です。

北海道内のNPOと連携したボランティアプログラム
ポラ旅北海道



小学生が放課後に森で遊ぶ「森っこアフタースクール」(月曜日)に加え、4月から幼稚園児版「森っこクラブ」(水曜日)が活動にお目見え!苦小牧での活動です。また栗山町では、北海道には珍しい「里山」で毎月第二土曜日に整備をしています。他にも下川町(森ジャム)、占冠村(村民山菜市)のサポートと、様々な市町村に出かけていく機会が増えていますよ。

都市の若者と森林をつなぐ
プロジェクト「NINOMIYA」



活動開始から2ヶ月、沢山の方が参加してくれました!その中でも、5月上旬迄にしか採れない「シラカバの樹液」が大好評。樹液を煮詰めコーヒーを淹れたり、しゃぶしゃぶをしたり。「ほのかに甘みがあって美味しかった」「しゃぶしゃぶが出来るなんて知らなかった」などの嬉しい声。これからも活動では楽しいアクティビティも合わせて実施予定です。お待ちしております!

サイクルシェアサービス
ポロクル



4月25日からポロクルの現場運営業務がスタートしました。約50名のクルーが札幌市街に飛び出して、自転車の移動やメンテナンスなどの業務に取り組んでいます。7月末に実施する自転車のルールマナーの普及啓発を目的としたイベント「自転車day」の準備も進んでいます。今年の目玉は昨年を引き継ぎ「自転車免許」。学科、教習、試験を実施し、全てクリアした参加者に免許証を発行します。

代表の小言
大学の授業を主体的な学び場に変えるには?

いくつかの大学で「ボランティア論」などの講師を務めていたのだが、これがなかなか面白い。「目」と「耳」を使った一方通行な授業ばかりを受けて来ているのだから、突然「どう思いますか?」と意見を聞いたところで返事が返ってくるわけがない。寝たりゲームをしている姿も珍しくない(自分の学生時代を考えると人の事を言えないのだが)。

同時に、「どのような授業を望んでいるか?」という質問に対して、「眠くならない授業がうれしい」というコメントが多いところを見ると、学生たちは一方的な授業に飽きてしまっているのではないかと感じる。

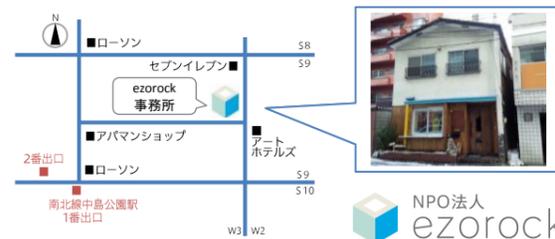
興味深い出来事があった。普段交流がない人同士で意見交換をしてみようというため、毎回様々な方法で席替えを行うのだが、先日初めて「手相」によるグループ分けを行ってみた。運命線の長さや曲がり方で会場を分類し、手相占いによる性格の傾向も一緒に伝えた。すると学生たちは自分の右手を観察したり、周りの人と見比べながら会話をしはじめ、自然と移動が始まり、どういいうわけかその後の授業もいつもより雰囲気よく、意見交換も活発になった。「気がつけば、主体的に考えて、結果としていろんなことを学んでいた」とそんな場づくりを心がけていきたい。

草野 竹史



大雪山国立公園 旭岳 自然保護 プロジェクト

今月の写真
旭岳での清掃登山の様子。中央に見えるのは忠別湖。



高度1600m `神々の遊ぶ庭'と呼ばれた天空の地へ!



大雪山国立公園 旭岳自然保護プロジェクト



↑「ギンザンマシコ」。雄が赤色、雌が黄褐色だ。冬になるとロシアなどから北海道に渡来するものが多いが、旭岳のギンザンマシコはここで繁殖している。



「禁止行為を押し付けるのでなく、お花やおすめルートの紹介の最後に付け足す。」

↑旭岳自然保護監視員の活動は、道、振興局、町、ロープウェイ会社による協会から自然学校への委託で行われている。



「植物保護のためのロープの補修。強い雨風にさらされるため定期的なチェックをおこなう。」



↑雨天時は川のようになることもある登山道。水を避けて植物を踏むことのないよう、簡易木道を置く。

活動時期は6月～10月。年間8回、主に土日祝を活用して2～4泊の日程。レインウェア貸出OK 運動靴と運動できる長袖長ズボンがあれば参加できます。申込→ezorockまで。



↑日本最大の大雪山国立公園。神奈川県と同じ大きさで10市町村をまたぐ。北海道最高峰の旭岳は、東川町に位置する。

「高山植物のアイドル「チングルマ」! なだらかな裾合平の地形は日本一の大群生を可能にしている。」



↑毎年数万人が訪れる散策路は、人や雨水の川で削れていく。石を組んで水の流れを調整。一見当たり前のようにある道も人の手で保たれている。



「ジブリみたい!」
「ここはもう森林限界?」
旭岳の麓(ふもと)からロープウェイに乗って8分で、標高千六百mの「姿見駅」へ到着する。駅から眼下に広がる視界に、感嘆の声が上がる。
「大雪山国立公園旭岳自然保護プロジェクト」。都市部の若者が国立公園の自然保護活動に参加するプロジェクトだ。シーズンの6月から10月に月1〜2回、主に旭岳の「姿見の池」散策路周辺で植物保護ロープの管理や散策者へのレクチャー等を行う。札幌や旭川から毎回5〜10人程のボランティアが集まる。参加者の動機や所属は様々だ。山が初めてという人もいるし、普段から環境保全を学んでいる学生や山岳部出身者もいれば、社会人もいる。初めての人も、勉強会や研修を経ているボランティアリーダーもいる。

石狩川と十勝川の源流をもつ大雪山国立公園は、日本一の面積を誇る国立公園だ。緯度が高く標高も高いため、ここだけ、もしくは非常に限られた地域でしか見られない貴重な高山植物や動物が生息している。また、二千m級の山々が広がる連なる地形は珍しく、その壮大な風景をアイヌ民族は「カムイミンタラ(神々の遊ぶ庭)」と呼んだ。
ボランティアを受け入れてくれるのは、この「姿見の池」エリアで自然保護業務を担当している「NPO法人大雪山山自然学校」の「旭岳自然保護監視員」の方々だ。
そもそも国立公園は「自然公園法」により様々なルールを持つっており、特にここは、中でも最も厳格に保護される「特別保護区」「第一種特別地域」となっている。その中で、NPOが管理したり定期的にボランティアが通うのは、全国でも珍しい事例だ。

ロープウェイ姿見駅に到着したボランティアは数名のグループに分かれてスタッフと行動する。まず1〜2時間かけて散策路を一周。ルートや地形、動物植物の名前や、注意事項のレクチャーを受ける。すれ違う散策者に花の名前などを聞かれることもあるからだ。
同時に、まず自分自身がこの風景や植物を楽しみ、好きになることもねらいだ。自然保護活動家ババ・デオウム曰く「人は自分が愛するものしか守ることが出来ない」と。
こうして時間を過ごす、徐々に「見当たり前」のようにある散策路や登山道に、実は多くの人の手が入っていることがわかる。例えば膝の高さにはられている植物保護ロープ。雨風にさらされるため定期的にチェックし、補修する。
「冬にそのままにすると雪の重みで千切れてしまうから、鉄ピンと一緒に片付けて春にまた張り直します。でも、しばらくは雪の上から刺すので、毎日のように刺し直しが必要です」と、監視員の小沼さん。
他にも、登山道の補修や、案内看板の整備、高山植物の盗掘防止や山火事防止・マナー啓発のための巡視活動、清掃活動などを行っている。その中でボランティアは、ひとつひとつの背景と理由を学んでいく。他にも、国立公園や山のルールについて現場で学びきれないことは、空き時間にボランティアリーダーからレクチャーを受けて補う。中でも「旭岳自然保護監視員はなにを目指しているのか」と、

「利用することについては、度々説明がある。一言でいうと「この自然をいつまでも楽しめるように残す」こと。そのために「利用者による国立公園の管理」を目指す」ということだ。
「利用者による管理」については、わかりやすい活動がひとつある。散策者へのレクチャーだ。年間約数万人訪れる散策者自身がおみせ拾うなどのマナーを守れば、自然も残りやすくなり、立ち入り禁止になつてしまわぬようになることもない。
そのために最初に散策者を集めてお花などの見どころ情報を伝え、最後にさりげなくマナーを付け足す。すると皆、耳を貸してくれ、聞いた人同士でもお互いの声をかけ合える。導入後、マナーが向上し、以前は5人必要だった巡回スタッフを1名まで減らすことができたそうだ。
こうした「利用者」とは散策者だけでなく、石狩川流域に住むわたしたちや、事業者なども含まれるのかもしれない。「実は恩恵を受けている人はたくさんいて、その人たちもそれぞれ形で管理に関わることができるようになりたい」と、大雪山自然学校の荒井さんは言う。
こうした数日間を終えた参加者からは「NPOってこんなことしてんだ」「ただ山に行くだけでは得られないやりのがある」「何度も行って、小さい花のきれいなさを知った」との声。
一度行くと、どうして残さなければいけないのか、頭で体で感じる事ができるはず。北海道最高峰へ行ってみませんか。

※この活動は、「東川町・大雪山国立公園保護協会」の自然保護対策事業を受託するNPO法人大雪山山自然学校と協働で実施しています。
※この活動は、平成28年度独立行政法人環境再生保全機構地球環境基金の助成を受けて実施しています。